論文

教職実践演習にみられる短期大学保育科学生の学びと変容
―幼老統合ケアの実践活動を通して―

芝　田　郁　子

１．はじめに

保育科課程における教職実践演習の意義は「教職課程の授業科目の履修や様々な活動を通して、学生が身につけた資質能力が、教員として必要な資質能力として有機的に統合され､形成されたかを最終的に確認すること」を目的としたいわゆる「学びの軌跡の集大成」にある。そのためには、学生が自ら考え、動くことができる内容であり、活動を行う中で、自分の資質を確認し、課題を見つけていくことが必要となると考えている。つまり、自主性、主体性に重きを置くことだと考える。

その一事例として、「『教職実践演習』における幼老統合ケア実践についての一考察」(2017）の中で、「多世代交流・共生を考える」というテーマを持ち、幼老統合ケアの実践を通して、学生が主体的に活動することが教職実践演習の「学びの軌跡の集大成」には有効ではないかと考え、その授業内容や進め方を述べた[1)]。本研究では、その実践した成果をまとめ、今後の授業改善につなげていくことを考えた。特にその成果として幼老統合ケアの実践で、学生が自分の資質を確認し、課題を見つけていくその過程において、どのように感じ、考え、学んだかを明らかにしようと考える。

２．研究の背景

人間は生理的早産とも言われる未成熟な状態で生まれてくる。その子どもたちが健やかに育っていくためには、人的・物的環境が非常に重要である。養育者の存在がなければ生きていけない乳幼児にとって、その人的環境で重要な役割を担っている母親の存在は大きい。それゆえ、母親と呼ばれる養育者が健やかで幸せであることは、子どもにとって非常に重要なことである。しかし、少子化や核家族化が進む現代社会においては、初めて経験する育児に悩む母親は多い。また、頼る存在がなく、安心できる育児環境が整わないことで、育児の喜びを感じることができない母親もいる。この現状に対して国も子育て支援施策に力を入れている。そして、保育者は、養育者である母親の相談者及び支援者としての

活躍を期待されている。さらに、地域の保育園及び幼稚園も子育て中の母親のために、保育園を活用した在宅子育て支援として、マイ保育園登録制度（妊娠時から特に３歳未満児のすべての子育てをする母親を対象に、身近な保育所を子育て支援の拠点にする制度）などのシステムを取り入れ、在園児ばかりでなく未就園児とその母親に対しても相談場所として様々な取り組みを行っている。

市町村においては､努力義務として改正母子保健法により「母子健康包括支援センター」(法律上の名称である。実際に、地域では子育て世代包括支援センターとして設置が促進され、予算が計上され、平成 29 年８月１日付で業務ガイドラインが公表された）の設置が謳われている。子育て世代包括支援センターは子育て世代の母親に対して、切れ目のない継続的な取り組みによる支援を考え、様々な状況に合わせた活動をしている。この子育て世代包括支援センターは、都市化、核家族化で孤立した家庭から，失われた地域コミュニティの「共生」関係によるつながりに代わり、意図的にシステムを構築し、子どもの健やかな育ちを支援していくものである。人と人のつながりが薄れていく中で、地域の実情を踏まえた子育て支援システムへの理解やその制度の進展は必須である。

上記のような地域社会に目を向けた養育者への支援を理解することは、子どもの健やかな育ちを見守り伸ばす専門職である保育者を目指す学生には重要である。子どもを守り育てるのは母親一人の役目ではなく、また、家庭のみが役割を担うものでもなく、社会で育てる視点を忘れないことである。そして、様々な世代の様々な人たちが子どもとかかわり子どもは育つということの大切さに気づく必要がある。一義的には自分の資質を確認する目的で学ぶ教職実践演習ではあるが、世代間交流として幼老統合ケアの実践から「共生」を考えることは、資質の確認にとどまらず、資質を深め、広げるため、有意義であり、視野が広がり、保育観に影響を与える力を持つと考える。

３．研究の目的

まず、幼老統合ケアの実践を通して、教職実践演習のテーマである「多世代交流・共生を考える」を目指し、学生が何を考え、学んだか、その内容を明らかにする。そして、それを踏まえた上で、学生一人ひとりの保育や子どもに対する見方がどう変わったかを確認する。加えて、学生が自ら変わっていくことを認識し、見えてきた今後の課題を示す。さらには、幼老統合ケアの活動方法の改善も含め、担当する教職実践演習のあり方も考えたい。

４．研究方法

（1）対象学生

平成29年度及び平成30年度に２年次生として在籍し､｢教職実践演習｣において演習テーマ「多世代交流・共生を考えるー幼老統合ケアの実践を通してー」を選択し履修した学生を対象とした。その対象学生は、平成 29 年度履修生８名、平成 30 年度履修生８名、合計 16 名の学生であり、性別による内訳はすべて女子学生である。

（2）教職実践演習のフィールド施設とその対象者

フィールド施設は、幼老統合ケアを実践しているＮ認定こども園のほか、同敷地内に同法人の児童養護施設及び高齢者の福祉施設が複数存在する複合福祉施設である。Ｎ認定こども園の年長児（定員 25 名）と特別養護老人ホーム、デイサービス、ケアハウス等を利用している高齢者 20 数名を対象としている。そして、Ｎ認定こども園側から活動に加わり、幼老統合ケアの意義を子どもの側に視点を置いて学び、多世代交流・共生を考えて活動している。

（3）方法

平成 29・30 年度の教職実践演習の活動は、幼老統合ケアを実施しているＮ認定こども園における活動中心に、表１、表２のスケジュールで実施した。このＮ認定こども園では日常的に園児と高齢者が様々な形での交流を行っている。その中で、学生がかかわりを持っている活動は、年長クラスの幼児 20 数名を２グループに分け、同法人・同敷地内の特別養護老人ホーム及びデイサービス等を利用している高齢者とかかわる小グループ活動である。また、その小グループ活動はゲーム等の企画を通して子どもと高齢者がかかわるプログラム交流である。そのプログラム交流の活動は見学及び参加に始まり、学生企画の交流プログラムの実施という流れをもっており、全体での訪問は年間５回を数えている。毎回、交流後には 20 分程度のミニカンファレンスを持っている。ミニカンファレンスは園長及び担当の保育教諭からアドバイスをもらい、さらに学生の疑問も解消する時間となっている。帰校後にはレポート提出を課している。さらに、前期末、年度末には教員と学生で振り返りのカンファレンスを実施し、教職実践演習の学習成果をまとめている。

これら、見学も含めたフィールド活動後のレポート内容と前期末及び年度末のまとめの内容から変化を見る。加えて、年度初めの学外ゼミナール（全学生が１泊）後に提出したレポートにみられる自己課題や抱負からも教職実践演習の目的である「学生が身につけた資質能力が、教員として必要な資質能力として有機的に統合され、形成されたかを最終的

に確認」を行う。そのため、全活動終了時の自己課題との比較も行う。

表１　平成29 年度「教職実践演習」スケジュール

回数	日にち	内容	備考
1	4 月 7 日	オリエンテーション　履修カルテ記入	履修カルテ提出
2	4 月 14 日	幼老統合ケアとは（講義）	
3 ・ 4	4 月 20 日	学外ゼミナール（講義・討論会）	課題提出
4 ・ 5	4 月 28 日	見学①施設見学（N 認定こども園）と講義	レポート提出
6	6 月 7 日	１年生との討論会（実習について）	
7 ・ 8	6 月 9 日	交流のための準備	
9 ・10	6 月 23 日	交流①日常的な交流に参加（N 認定こども園）	
11	6 月 30 日	交流の振り返り	レポート提出
12・13	7 月 7 日	交流②行事(七夕)における交流に参加(N 認定こども園)	
14・15	7 月 28 日	交流の振り返り　前期のまとめ　就職に向けての課題と対策	レポート提出
16	9 月 8 日	履修カルテ記入	履修カルテ提出
17・18	9 月 29 日	プログラム交流に参加（年長児と高齢者）	レポート提出
19・20	10 月 13 日	準備（交流プログラム作成）	交流プログラム提出
21・22	10 月 27 日	見学②（愛知たいようの杜）	レポート提出
23	10 月 28 日	討論会(保育実習指導Ⅱ「保護者支援の実際」の講演について)	
24・25	11 月 10 日	学生プログラムによる交流及び実施後カンファレンス(N 認定こども園)	レポート提出
26	12 月 6 日	1 年生と交流	
27・28	12 月 8 日	学生プログラムによる交流及び実施後カンファレンス(N 認定こども園)	レポート提出
29	12 月 15 日	*「すくすく広場」参加（学内・子育て支援）*	レポート提出
30	1 月 12 日	まとめ　履修カルテ記入	レポート提出、履修カルテ提出

表２　平成30 年度「教職実践演習」スケジュール

回数	日にち	内容	備考
1 ・ 2	4 月 6 日	オリエンテーション、幼老統合ケアとは（講義）履修カルテ記入	履修カルテ提出
3	4 月 20 日	学外ゼミナール（講義・討論会）	課題提出
4 ・ 5	4 月 27 日	見学①施設見学（N 認定こども園）と講義	レポート提出
6 ・ 7	5 月 11 日	交流に参加①（N 認定こども園）	レポート提出
8	6 月 6 日	１年生との討論会（実習について）	
9 ・10	6 月 8 日	交流に参加②（N 認定こども園）	レポート提出
11・12	6 月 15 日	見学②（愛知たいようの杜）	レポート提出
13	6 月 22 日	就職に向けての課題と対策	
14・15	7 月 28 日	交流の振り返り　前期のまとめ	レポート提出
16・17	9 月 7 日	活動計画作成　履修カルテ記入*「こんにちわ赤ちゃんプレ講座」*	履修カルテ提出
18・19	9 月 14 日	0 歳児対象講座（学内）	レポート提出
20	10 月 19 日	討論会（保育実習指導Ⅱ「保護者支援の実際」の講演について）	課題提出

21・22	10 月 26 日	*柳城祭　子どもフェスタ準備*	
23	11 月 3 日	*柳城祭　子どもフェスタ参加（昔の遊び：竹とんぼ・紙飛行機）*	
24	11 月 9 日	学生プログラムによる交流の準備	
25・26	11 月 26 日	学生プログラムによる交流及び実施後カンファレンス(N 認定こども園)	レポート提出
27	12 月 5 日	1 年生と交流	
28・29	12 月 7 日	学生プログラムによる交流及び実施後カンファレンス(N 認定こども園)	レポート提出
30	1 月 11 日	まとめ　履修カルテ記入	レポート提出、履修カルテ提出

※　　は「教職実践演習」を履修しているすべての 2 年生に対し実施している内容
※　*斜体*で書かれている内容は「教職実践演習」で実践することを推奨された内容

5．結果

（1）学外ゼミナール後の提出レポートにみられる自己課題と抱負

「教職実践演習」では学習のねらいを達成するため、担当する各教員がテーマを通して「学びの集大成」を行っている。掲げたテーマにより各々の教員に 2 年次生が 10 名前後集まる。学外ゼミナールとはその 2 年次生と、その教員がアドバイザーとして担当している 1 年次生のアドバイジー（10 名前後）が、同じゼミのメンバーとなり、討論会、運動会、造形活動（海辺で砂の造形）で一緒に行動する大学の恒例の 1 泊行事である。これは、1 年次生の歓迎会をも兼ねている。このゼミナールでは活動後にレポート提出が課せられている。そのレポートで自己課題と抱負について学生が記述している内容をまとめた。

平成 29 年度の履修生の傾向は「人任せにしていた」「受け身なところが多く」「他人の意見に従ってばかり」「人前で意見が言えない」「周りを気にし、行動できない」など受け身で消極的なところを課題ととらえていた。そして、自分の考えを周りに伝え、皆のために、自主的に動きたい、何か挑戦したいという気持やみんなに信頼されたい気持ちが「チャンスがあれば挑戦したい」「自分をしっかり持って」「人のために」「友だちを大切に」という言葉に出ていた。その他に「楽に終わらせようとそのことばかり考えていた」「謝ることができない」自分を変えたいとの思いも書かれていた。

平成 30 年度の履修生は、リーダーとしての役割を果たしてきた学生も、メンバーとしての役割の学生も自身のマイペースなところを課題としていた。それは、「一人でやり、人に聞かず、抱え込む」「リーダーとして全部やってしまう」「仲間と協力するのは面倒くさい」「自分がよければよいという考えで行動していた」の言葉に現れ、それは、「仲間と協力する大切さ」「友人に頼ることも必要」「友だちの気持ちを深くまで考え行動」したいとの気持ちを持つことにつながっている。その他、「自分の意思を持つ」「自分のやりたい

ことを明確にする」「人前で話すことに慣れる」「誰かの手助けができ、頼られる人になりたい」など自分の意思を周りに伝え、信頼される人になりたいという目標は平成 29 年度生及び平成 30 年度生共にみられた。

（2）フィールド対象施設における幼老統合ケアの見学及び参加から学生が学んだこと

①平成 30 年度履修生

初回のかかわりでは、「緊張し、自分がどう行動していいか精いっぱいで気持ちに余裕がなく」また、「高齢者とのかかわりは専門外との意識で自信が持てず」「どうしたらいいかがわからずためらいがあり、頭で考えすぎ行動がとれなかった」などの感想が共通していた。そして、「客観的に眺め、幼老統合ケアの効果や意味まで気づくことができなかった」と言う。ただ、高齢者は、無表情の人も誰もが笑顔になり、子どもに触れたがるなど感情や行動の変化が大きくわかりやすかったため、高齢者への影響はよい作用としてしっかり見ることができたと学生全員が感じていた。

２回目では、かかわりを子どもの側からも見ることができてきた。高齢者からありがとうと言われ嬉しそうにしている子どもの姿をとらえたり、反応の少ない高齢者にも積極的に話しかけている子どもの姿に学生が学び、「自分は積極性に欠けていた。何も深く考えず自然に話す子どもの姿に刺激された」と述べている。

そして、幼老統合ケアの施設見学及び活動への参加を経た前期の振り返りでは、「子どもと高齢者が同じ時間・空間で利益や学びを求めるためでない楽しい時間を過ごすこと」「世代が異なるが気持ちを共有すること」「高齢者のゆったり時間に子どもが触れること」で、お互い感情が豊かになると感じていた。中には「笑顔が伝染する」との表現もみられた。また、「環境を整え、子どもと高齢者の仲介を無理なく自然に行うことが保育者の役割だ」と述べている。その他には、「ねらいをもってかかわることを重視し育てようとするのでなく、子どもが高齢者とかかわるというちょっとした経験を積み重ねることで一つの育ちになる」と感じた学生もいた。

②平成 30 年度履修生

高齢者とのかかわりでの戸惑いを述べている学生は１名で、他の学生は、子どもに焦点を当てたかかわりを観察しての意見が多く、子どもの力に驚いている。「いろんな反応をする子どもたちも歌ったり手遊びする中では高齢者のペースに合わせていた」「高齢者と交流する前に歌や手遊びを確認し合っていた」「高齢者が集まってくる中で、積極的に話しかけている子どももいる」「高齢者に自分から手に触れたり、話しかけたりしていた」「元

気のない高齢者も子どもと接し、笑顔になっていくのを見ることができ嬉しい気持ちになった」「子どもは握手に泣く高齢者に戸惑いながらも笑顔を絶やさなかった」「高齢者が嬉しそうにしていたり、涙を流したり、その姿を見ている子どもはそのまま受け止めていた」「子どもは高齢者とペアになるときに嫌だということが１度もなく、空気を読み大人だと思った」と述べ、「子どもの不思議な力は周りを幸せな気持ちにする」「改めて子どもの力を強く感じた」としている。

さらに、学びを以下に伝えている。それは、「高齢者の外見や行動について何も言わず当たり前になっているいい環境である」「高齢女性に目を合わせて話しかけると反応してくれ、返事してくれたので目を合わせることの重要性を知ることができ、あきらめず話しかけることが大切だと思った」「子どもは高齢者を喜ばせることはできるという体験が有能感となり、人格形成によい影響になる」「個別のかかわり方、その人に合ったかかわりが必要と感じた」「話さない人、下肢がない人いろいろな高齢者に不安や恐怖心があっても泣き出さず、なぜなぜと聞かないのは小さい時から、交流できる環境にあるから、客観的に観察することで理解し学んでいるのだと思った」である。

前期の振り返りでは子どもの力のすごさや子どもの変化を感じている意見が出ていた。高齢者が子どもと接した時の変化はわかりやすく、高齢者が元気で明るくなる状況を見て、「生きがいにつながる」「運動の機会になる」と初回からすぐに感じ発言していた。また、前期において、すでに子どもへの変化や影響を知識としてだけでなく実感できていた。「子どもは保育者が指示しなくても自分から積極的に高齢者とかかわり、応援している」「様々な高齢者の様子をありのままに受け入れ偏見を持っていない様子で交流後に一様に楽しかったと発言していた」が挙げられていた。そして、歌に合わせた手遊びと一緒に身体を動かすことを自分たちが企画し実施する交流プロクラムに入れたいとの意見が多く出ていた。

（3）交流プログラムの企画及び実施から学生が学んだこと

①平成 29 年度履修生

学生は幼老統合ケアの実践場面の見学及び参加を通して、自分たちの交流プログラムでは要介護度の高い高齢者も一緒に楽しめる一体感のあるものとして、音楽を使うことと簡単に楽しめるゲームを実施したいと考えた。

実際に 11 月には「ドキドキボール回し」、12 月には「ボール渡し」を実施した。「ドキドキボール回し」は、高齢者と園児が交互に並び円を作り、音楽を流し、ボールを回して

いくゲームである。途中、音楽を止めるが、音楽が止まった時に動きも止めなければならない。音楽が止まった時にボールを持っていないように隣に回していくゲームである。しかし、いつ音楽が止まるかわからないのでドキドキするのである。回すボールは２つ、３つと増えていくという変化があり、音楽が止まった時ボールを持っている人は「どんな果物が好きですか」などの質問に答えなければいけない。「ボール渡し」は高齢者と子どもがペアになり、円を作る。新聞紙で作ったボールを新聞紙にのせ、新聞紙を持った隣のペアに新聞紙ボールを送っていくゲームである。2チームに分かれ、どちらが速いか競うゲームとなっている。

いずれのゲームも同じ企画を要介護度の低い高齢者と子ども、要介護度の高い高齢者と子どもの２チームになり、1・2階のフロアーに分かれて実施した。学生も４名ずつ２チームに分かれた。12月においてはホールに一同が会し、２チームに分かれ競い合った。

２回の企画及び実施の経験から交流プログラムを企画し実施することで学生が学んだことは①臨機応変さ、②危険予測と安全面への配慮と安心感、③ルールの説明など全体への伝え方の３点をであった。この３点において、「子どもと高齢者の特徴を理解し、子どもがリードしながら高齢者にかかわるように保育者がかかわりすぎないで仲介役をする」。そして、「子どもと高齢者が安心して、ゲームを楽しめる環境を変化に合わせ整える行動が自分も楽しみながらできるようになりたい」ということが学生の思いであった。

臨機応変さについては「ゲームに慣れてきたとき少しずつ変化をつけ、レベルを上げていく」「物品が不足した時に同じ条件でゲームができる」を具体的に挙げている。危険予測と安全面の配慮と安心感ついては、「高齢者や子どもの特徴を理解し、危険を予測し対応を考えておく」「子どもは反応がわかりやすいが、高齢者の反応がわからない」「競争は楽しいが子どもはボールに触りたくて子ども同士がケガしないようにルール変更する」「『環境が変わると自分らしくいられない子』や『言語的コミュニケ―ションができない高齢者』の代弁をする」「開始前に子どもたちに安全面で気をつけることを伝える」などの意見があった。ルールの説明など全体への伝え方については「堂々とした態度でわかりやすく」「言葉だけでなく動作で示す」「一方的に話すのでなく理解できたか確認する」という意見があった。

②平成30年度履修生

交流プログラムは、11月は「玉入れ」、12月は「ペットボトルボーリング」を企画し実施した。高齢者の要介護度によって、方法に工夫を加えていた。要介護度の低い高齢者と

子どものグループの玉入れは、傘の部分が反転可能なビニール傘を反転させた状態で学生が傘の柄を持つことで固定させ、その中に玉を投げ入れてもらった。設定した時間内でより玉を入れたグループが勝つという方法を採った。要介護度の高い高齢者グループの玉入れは、高齢者が座っている前をひものついた大きな箱を引っ張りながら通過させ、その動いている箱の中に玉を入れる。箱を引く速度はひもを引いている学生が臨機応変に決める。やはり、勝敗は箱に入った玉の数で決まる。

12 月の「ペットボトルボーリング」は介護度の高い高齢者と子どものグループの場合はボールを投げることができない高齢者のための短いレーンを学生が角度をつけて手元に持っていき、そこにボールを落とす方法を採っていた。

この活動から平成 30 年度生が指摘した企画及び実施の留意点は①臨機応変さ、②子どもと高齢者のかかわりを増やす、③ルールの説明など全体への伝え方、④事前の準備・練習だった。②と④が前述の平成 29 年度履修生と異なった。11 月の玉入れは子どもチーム対高齢者チームで競わせた。その方法に対して高齢者と子どもがかかわり合うという本来の目的から考えると好ましくなく、ペアになり協力し合うほうが目的にかなっていると園長からアドバイスもらった。そのアドバイスは学生も実感し、全員が②を強調し留意点としていた。12 月は高齢者と子どものペアでゲームを進めていた。④については役割分担ができていたことを挙げた学生、事前確認において、実際の場面に近い状態で、ゲームで使うため作成したものを使用し、課題解決をしなかったことを挙げた学生、開始時間前に子どもたちと打ち合わせして、ゲーム進行がスムーズだったことを挙げた学生がいた。その他、「事前に子どもとゲームの練習をしたことで本番の意欲が高まった」「子どもにもピンを直したり、倒したピンを数える役割がありよかった」「普段活発でない子が積極的に楽しみ、声を出す姿に交流のメリットを感じた」などの意見があった。

（4） 1 年間の活動の振り返り

活動の振り返りについては、幼老統合ケアの実践から学べたことと活動で見えてきた自分の課題及び保育観についての 3 点についてまとめた。

1）幼老統合ケアの実践から学べたこと

①平成 29 年度履修生

高齢者、子どもそれぞれについてどのような影響があるかとその他の学びがあった。影響については「相互によい影響をもたらす」と、どの学生も述べている。子ども側からみると、以下のメリットが認識された。「自分わがままを受け入れられたり、褒められたり、

可愛がられることで自己肯定感や安心が得られる」「高齢者のゆったりした時間感覚で過ごせる」「普段目にする健康な高齢者と違い人の手を必要とする高齢者に戸惑ったとしても、高齢者像が変化し、どのような高齢者がいても当たり前と思えるようになる」「昔ながらの伝統や知恵を得ることができる」「文化の継承ができる」「小さい時からさまざまな人と関わることで、コミュニケーション能力がつく」「新しい発見や経験ができる」「優しい気持ちを持て、人として成長できる」などである。高齢者から見ると、以下のメリットがある。「普段得られない刺激を受け、いろんな気持ちが湧き、生活が豊かになる」「子どもに会えるのを楽しみに毎日過ごせる」「子どもから元気をもらい、生活にメリハリが持てる」「子どもを見て、笑顔が増え、幼少期の自分、幼少期の子どもの姿がよみがえり、懐かしむことができる」また、「職員も交流の様子を見て、子どもや高齢者の気づけない性格や変化などがわかる」という意見もあった。

その他の学びを列挙してみる。「高齢者とかかわったことで自分自身が、今まで気づけなかった高齢者の性格や特徴に気づくことができた」「提案できること、臨機応変に対応できること、落ち着いて対応すること、自分から気持ちを察して声をかけること、子どもの性格を理解すること、高齢者と子どもの仲立ちをすることが重要だと感じた」「幼老統合ケアは『ケア』とついているから特別な技術が必要かと思ったが、普通の生活であり、自然な高齢者と子どものかかわりだと思った」「『幼老統合ケア』というテーマで学んだから保育者のかかわりや保育の考え方を学ぶことができた」「高齢者も子どもも楽しめるようにと考えたら、自分も楽しめた」「準備不足もあったが、チームワークや臨機応変に行動する大切さが学べた」「伝えることの大切さや伝え方が学べた」など個々の学生がさまざまな学びをしている。

②平成 30 年度履修生

平成 30 年度履修生も幼老統合ケアに関して、子どもと高齢者双方によい影響をもたらすとの実感を得ている。子ども自身に与える影響と子どもが高齢者等に与える影響を次のように言っている。「子どもは小さいころから高齢者への接し方を体験できる」「優しさや相手を思いやることができる」「子どもは思いやりを持ち、公共施設でのマナーや振る舞い方、さまざまな人がいることが学べる」「子ども同士のかかわりから生まれる成長のほか、新たな姿も見ることができる」「子どもが高齢者に思いやりを持って接しており、大人以上に大人だと感じた」「高齢者に活力を湧かせる子どものパワーはすごいと感じた」「子どもが笑顔だと大人も笑顔になる。子どもが周りに与える影響は大きい」「高齢者にとって

子どもたちの存在は、元気を出し、優しい表情や気持ちを自然に出してくれる生きがいとなるものだとしみじみ感じた」など述べられた。

さらに、次のような学びもあった。まず、学生は一様に、子どもと関わっている時の高齢者の反応にびっくりする。高齢者が見たことがない素敵な笑顔をするからである。その笑顔が強い印象として残るようである。そして、一様に子どもの力はすごいという。「高齢者とどう接していいかわからなかったが子どもを見て学んだ」という学生も平成 30 年度履修生にもいた。自分たちの活動について、「子どもが楽しく遊んでくれ、高齢者も動ける範囲で頑張ってくれてよかった」「協力して何かを作り考えることで、まとまり、さらにアイデアが出て、考えが広がった」「皆で臨機応変に対応し、無事にやり遂げ大きな達成感を味わった」「自分たちが考えたプログラムで子どもや高齢者の笑顔をたくさん見ることができ嬉しかった」「その場にいる誰もが楽しく、プラスに作用することが重要だと感じた」などがあり、どれも実感を伴った学びだった。また、幼老統合ケアに対し、「高齢者とのかかわりが新鮮だった」「保育をする上でのメリットを実感でき、保育者としてのアイデアの一つとして覚えておきたい」「今まで自分たちが体験してきていないことを知り、知らなかったことを多く学んだ」などの意見も出ていた。

２）自己課題

①平成 29 年度履修生

前述した学びとして重要と感じたことが自分への課題につながった学生も多かった。「臨機応変に行動できること」「対象者を理解し、かかわり方を考えていくこと」「保育者になっても高齢者と子どもがかかわっていく場を提供すること」「新しいことに挑戦すること」「保育の遊び等の技術の引き出しを増やすこと」などが挙げられた。

②平成 30 年度履修生

平成 30 年度履修生も平成 29 年度履修生と同様に「臨機応変に行動できること」は挙げられていた。さらに、「年齢に応じた接し方」「高齢者や障害者に詳しくなること」「自分の意見を持ち、細かい部分まで考えて行動することが重要、自分から率先して行動し、自分に何が一番できるか、プラス面を活かしていくこと」「連携すること」「自分の意見を伝える積極性を身につけること」「コミュニケーション力を高めること」「企画力や行動力を高め、楽しいクラス運営ができるようになること」など活動を通して実感した課題である。

３）保育観

①平成 29 年度履修生

取り組みの中での気づきは広義にとらえれば、保育に関係するものばかりともいえるが、保育観ということで「保育」や「保育者」という言葉を使っての記述だけを挙げた。「何が正しい、何が間違っていると考えないで、それぞれの子どもに適した保育をする」「保育のしかたは一つではない、どんな保育が正しいのか、ばかり考え、自分らしさを失っていた、自分の中にある保育に対する考え方が変わった」「自分の中で当たり前となっていた保育観に縛られることなく、考え方を柔軟にしていきたい」「保育者としての目標を立て、自分らしさを見つける必要性を考えることができた」が記述にみられた。

②平成 30 年度履修生

平成 30 年度履修生についても「保育」や「保育者」という言葉を使っての記述だけを挙げると以下の内容がみられた。それは「保育が合わないときは一人で苦しむのではなく、自分に合う保育が数ある園の中から見つかることを思い出す」や、幼老統合ケアを「保育をする上でのメリットを実感でき、保育者としてのアイデアの一つとして覚えておきたい」と述べているものである。

（5）その他

教職実践演習のテーマである「多世代交流・共生を考える」に到達するための助けとして、フィールド活動の対象園以外で世代間交流・共生を施設の理念に入れている施設の見学や共生を目指した施設づくりをしている法人の DVD 視聴を行った。前者は託児所、幼稚園、複数の高齢者施設（特別養護老人ホーム、グループホーム、デイサービス、訪問看護、ケアハウス）や古民家、喫茶店が敷地の中に点在し、一つのまとまりを作っている場所への見学である。後者は、東京ドームよりやや小さい敷地に、高齢者や学生、障害児・者など、およそ 70 人が一緒に暮らす「多世代共生タウン」の DVD の視聴である。建物としては高齢者や障害児・者の施設、地域の人も使用できるクリーニング店やレストラン、売店、天然温泉、学生アパート、イベント施設などが混在している小さな町での生活や取り組みを見せるものである。

幼老統合ケアの実践活動の途中に前述の見学や DVD の視聴を組み入れている。したがって、共生に対しても、「障害者や高齢者のみの生活にならないようにしたほうが生活の質が上がる」「自然に地域住民と障害児者交流できる工夫が必要」「いつの間にかいろんな人と交流している、気軽に施設外の人が訪れ、子ども、高齢者、障害者など多世代が交流できる複合施設の魅力を多くの人に知ってもらう」「多世代交流が毎日のようにあれば、施設に住んでいるのでなく、町に住んでいる感覚になる」「施設の人以外でも日常的にほっ

とできる共通の場所にすることが望ましい」「高齢者サービスは受け手になるだけでなく担い手としても活躍できる場を作り、得意分野で誰かの支えになる実感が必要」「いろんな世代の人が交流するのは毎日新しい発見ができ、楽しく、新鮮な１日、１日になる」などの意見が出てきた。

６．考察

本研究の目的は３つであった。第一に幼老統合ケアの実践を通して、教職実践演習のテーマである「多世代交流・共生を考える」を目指し、学生が何を考え、学んだか、その内容を明らかにすることである。第二は、学生一人ひとりが保育や子どもに対する見方が変化し、変わっていくことを認識し、見えてきた今後の課題を明確にすることである。第三には、幼老統合ケアの活動方法の改善も含め、担当する教職実践演習のあり方をも考えることであった。

一つ目の「学生は何を学んだか」から見ていくと世代間交流である幼老統合ケアは子ども、高齢者双方にとって良い影響があるということ学んでいる。その内容を子ども側からみると幼少期から生活歴が長いがゆえに個人差の大きい高齢者の方々と接することでいろんな人をありのままに受け入れることができるようになるということであり、自分が高齢者になっていくこともイメージできるということである。また、世代が異なるということは同年代に比べ、価値観や生活様式等を含め異質性が大きいということであり、様々な経験ができ、その積み重ねが子どもの人格形成に広がりや変化、柔軟性を持たせるのではないかということである。さらに、高齢者は子どもが可愛いので無条件に褒めてくれ、自信を持たせてくれる存在という視点も大きいと学んでいた。

高齢者側からみると、一見して効果を感じるほど、表情が変わるということである。笑顔になるのである。子どもと話をし、かかわりたい様子が見えることである。感情が動かされる源に子どもがなることをすべての学生がすぐ感じとった。自分の孫でなくとも子どもは生きがい、希望になりうるということである。これらの気づきに加え、さらに、自分たちも高齢者と子どもの双方から学ぶ点があり、かかわることに楽しさを感じ、いろいろな人がいることが当たり前になる共生社会がいい影響を互いに与えると感じ取れたようである。それは、「障害者や高齢者のみの生活にならないようにしたほうが生活の質が上がる」「いろんな世代の人が交流するのは毎日新しい発見ができ、楽しく、新鮮な１日、１日になる」「いつの間にかいろんな人と交流している、気軽に施設外の人が訪れ、子ども、高

齢者、障害者など多世代が交流できる複合施設の魅力を多くの人に知ってもらう」などの意見に現れていると考える。

二つ目は、「学生の変容」である。学生自身が落ち着いて活動ができるようになると、子どもが高齢者を気遣い自ら行動し、他の保育場面で見られない積極的な行動をとる様子をみて、子どもに対する見方が変化したようである。また、子どもは単に育てる存在ではなく育つ存在であること、未熟な存在ではなく、不思議な、力のある存在と強く意識し、子どもからも学ぶことがあると気づいたことも大きな変化であり、今後の保育の中でも子どもを一人の人格ある人間として尊重していくのではないかと考えた。

さらには、保育に対しても正しい保育というものがあるかのように感じていた学生が、「何が正しい、何が間違っていると考えないで、それぞれの子どもに適した保育をする」の言葉に現れているように枠をはめない柔軟な考え方に変化していることがわかる。また、「保育が合わないときは一人で苦しむのではなく、自分に合う保育が数ある園の中から見つかることを思い出す」と保育観の違いを前提に、自分の保育観を大切にしたいと考える発言をする学生もいた。

そして、自己課題にも関連していく変化もみられている。2年次の4月には、受け身で消極的なところや、マイパースでチームでの活動に興味がない、人に任せられないところなどが課題で、自分の意見を伝え、人とかかわり、積極的に行動し、挑戦することを目標としていた学生が多かった。この課題についてその変化を考える。小グループでの活動であり、自分たち8人で企画し実施しなくてはならなかった状況もあり、様々な場面で自分の強みを活用し、課題に挑戦できる機会は多かった。そのため、協力することによる成果を実感した「『幼老統合ケア』というテーマで学んだから保育者のかかわりや保育の考え方を学ぶことができた」「準備不足もあったが、チームワークや臨機応変に行動する大切さが学べた」「伝えることの大切さや伝え方が学べた」「協力して何かを作り考えることで、まとまり、さらにアイデアが出て、考えが広がった」「皆で臨機応変に対応し、無事にやり遂げ大きな達成感を味わった」「自分たちが考えたプログラムで子どもや高齢者の笑顔をたくさん見ることができ嬉しかった」などの記述がみられた。積極性が増し、チームでの活動の楽しさや自分の力をチームの中で発揮することの喜びがわかる成長がみられたと考える。

三つ目は、「教職実践演習のあり方」である。まず、幼老統合ケアの活動についてである。学生は活動の趣旨がわかってくると、より子どもを観察し、個々の子どもの変化にも気づ

く学生が多い。この観察の視点や子どもへの気づきを大切にするため、子どもと高齢者がかかわっている時間帯だけでなく子ども（年長クラス）とのかかわりの時間を持つことにした。それを考えたのは、以下の経験からである。明確な意図なく、子どもに慣れるため交流プログラム開始１時間前には園を訪問し、子どもたちとかかわる時間を設けていた。２年目の平成 30 年度履修生は、偶然のことから、後期学生立案のプログラム実施時に子どもと打ち合わせをすることができた。すると子どもの取り組みも積極的になり、学生も子どもを指導する機会になった。偶然性もあったが、子どもと高齢者がかかわっている時間帯だけでなく子ども（年長クラス）とのかかわりの時間を持つことで子どもたちとのつながり強くなった。その結果、12 月の最期のＮ認定こども園での活動日には子どもたちが、卒園制作を見せてくれ、全員が対面しての「ありがとうございました」の言葉ももらった。これは学生にとっては嬉しいことであったと思う。したがって、今年度から意図的に交流プログラム前のかかわりを組み入れていこうと考えたのである。

さらには、企画力、会議などの組織コミュニケーション力をつけるために学生企画の交流プログラムの打ち合わせを学生主体のものにしていく。打ち合わせは代表学生を引率する形で行った。本年度からは担当教員は学生企画に対し具体的な助言は控え、より学生がＮ認定こども園側の園長先生などと主体的に打ち合わせができることを考えた。事前に企画を５つ FAX で伝え、打ち合わせ当日も学生の発言を促した。メンバーは園側３名（園長、副園長、担任）学校側３名（教員、代表学生２名）40 分程度のカンファレンスとなった。今後もこのような形は継続したい。

最期に教職実践演習として「多世代交流・共生を考える－幼老統合ケアの実践を通して－」というテーマで活動することは文部科学省が示している「教職実践演習」の４つのねらいのうち②社会性や対人関係能力に関する事項である。そして主としてねらい②に関連して、授業内容例として挙げられている、「関連施設・関連機関（社会福祉施設、医療機関等）における実務実習や現地調査（フィールドワーク）等を通じて、社会人としての基本（挨拶や言葉遣いなど）が身に付いてるか、また、保護者や地域との連携・協力の重要性を理解しているか確認する」を実践していると言える。しかし、「主として」と記載されているように②のねらいにとどまることないと考える。実際に子どもとかかわり、自分たちの企画を通してＮ認定こども園の園長をはじめ教職員の方々や特別養護老人ホームの高齢者および介護職員の方々、学生同士のチームアプローチを経験するわけである。したがって、他のねらいである①使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項（教師の仕

事に対する使命感や誇り、子どもに対する愛情や責任感など）③幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項（「教師は授業で勝負する」に表現される力で、具体的には、子ども理解力、指導力、集団指導の力、学級作りの力、学習指導・授業作りの力、教材解釈の力などからなるもの）④教科・保育内容等の指導力に関する事項（子どもたちの人格形成に関わる者として、豊かな人間性や社会性、常識と教養、礼儀作法をはじめ対人関係能力、コミュニケーション能力などの人格的資質）の事項についても内容は満たしていると考える。このテーマを継続し改善していくことで、この授業の趣旨「保育者としての資質を確認し学びの軌跡の集大成とする」に、より合致した内容になると考える。

７．おわりに

今回の研究は活動ごとに提出されたレポートをもとに学生の学び、変容を明らかにし、教職実践演習のあり方を考えるものであった。その結果、このテーマ「多世代交流・共生を考えるー幼老統合ケアの実践を通してー」を継続することが重要であると実感できた。それは、学生は１年ごと変わるが、N 認定こども園は同一であり、学生がかかわる以前から幼老統合ケアの実践を重ねてきている施設であるため、蓄積するノウハウは確かにあり、学生の学びは継続し深いものになると考えることができるからである。教職実践演習という授業枠での活動であるため教員が全体を俯瞰し到達目標向けてのスケジュール調整や環境作り、課題の設定、評価は行うが、あくまでも学生の自主性や主体性を損なわず、学生が自己課題を見つけるため、自分の保育者としての資質確認ができるようにしていきたいと考える。

この研究は、学生の課題レポートの内容から抽出したものであるため、よい評価を得るという意識が働き、ネガティブな表現や否定的な言葉がなかったかもしれない。しかし、活動後の学びに対する自己課題は実際の体験をもとにしており、その体験は個人的なものであるため、誰かの言葉を借りたものではなく、まさに本人の実感であり、その変化は身を持って学んだものとして信ぴょう性があると考えている。

今までにない経験を自分たちで企画し実施するという自主性を持って主体的に考え行動するという実体験は、保育実習や教育実習と異なる「授業科目の履修などで身につけた知識・技術の有機的な統合」の実践であると考える。

最後に、学生に実践の場を与えてくれ、応援してくださっている N 認定こども園の園

長先生をはじめ、園の教職員の皆様、年長クラスの子どもたち、そして、同法人の複数の介護施設の職員の皆様や高齢者の皆様に感謝申し上げます。

引用・参考文献

1）芝田郁子，2017,「教職実践演習」における幼老統合ケアの実践活動に関する一考察 名古屋柳城短期大学紀要第 39 号　pp183 ～ 203

2）草野篤子，金田利子，藤原佳典，間野百子，柿沼幸雄，2010,『世代間交流学の創造―無縁社会から多世代間交流型社会実現のために』あけび書房

3）草野篤子，内田勇人，溝邊和成，吉津晶子編，2012,『多様化社会をつむぐ世代間交流―次世代への『いのち』の連鎖をつなぐ』 三学出版

4）多湖光宗 監，2006,『少子高齢化も安心！幼老統合ケア―“高齢者福祉”と“子育て”をつなぐケアの実践と相乗効果』幼老統合ケア研究会 (編集) 黎明書房

5）広井良典，2000,『「老人と子ども」統合ケア―新しい高齢者ケアの姿を求めて』中央法規

6）斎藤嘉孝，2010,『子どもを伸ばす世代間交流』勉誠出版

7）文部科学省，2017,「教育課程コアカリキュラム」中央教育審議会

8）文部科学省, 2015,「これからの学校教育を担う教員の資質の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～（答申）」中央教育審議会

9）文部科学省，2006,「今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）」中央教育審議会

10）文部科学省，2005,「新しい時代の義務教育を創造する」中央教育審議会

Learning and Transformation of Junior College Childcare Students in Teaching Practice Seminar: Through Practical Activities of Integrated Care of Preschoolers and the Elderly

Shibata, Yuko*

本論文は、幼老統合ケアの実践を通して、教職実践演習のテーマである「多世代交流･共生を考える」を目指し、学生一人ひとりが何を学び、どう変容し課題を見つけたかを明らかにする。そして、幼老統合ケアの活動方法の改善も含め、教職実践演習のあり方を考えるものである。

まず、学生は世代間交流である幼老統合ケアは、子どもと高齢者双方にとって良い影響があると感じた。異質性の大きい多世代との交流は新しい発見や刺激が多く、生活を豊かにし、人格形成に大きく影響すると学生は学んでいる。その結果、共生についても「いろんな人がいることが当たり前」であり、「生活が豊かで楽しくなる」と考えている。

次に、学生は子どもを力ある存在と認め、保育に正しい保育があるわけでなく、自分らしさを失わないその子に適した保育を考えることが重要であるとの保育観を持つように変化した。

さらに、教職実践演習においては学生の意見も取り入れ調整しながら、このテーマを継続していくことが活動効果を高めると考えた。活動の場は幼老統合ケアの実践を重ねてきている施設であるため、蓄積するノウハウは確かなものである。学生の自主性や主体性を損なわず、保育者としての資質確認ができるようにしていきたい。

キーワード：共生，多世代交流，幼老統合ケア，学生の変容，教職実践演習のあり方

**Nagoya Ryujo Junior College*